

1910 年代日本における建築様式の解体過程と構造技術の進展

京都大学大学院 工学研究科 建築学専攻 准教授 田路貴浩

本研究は、西洋の歴史的建築様式の学習が完了し、日本独自の様式を模索して建築が劇的に変貌する 1910 年代を対象に、近代建築受容の最初期の様相を解明しようとするものである。とくに、建築様式が折衷化して解体する意匠上の変貌と、レンガ造から鉄骨造やコンクリート造への構造技術の発展の相関について、作成したデータベースを活用して実証的な分析を行った。

本年度は 1910 年から 1923 年までの『建築雑誌』および『建築世界』を対象に、掲載されたすべての建築作品を収集してデータベースを作成した。すでに前年度の調査で、1910 年から 1920 年までの『建築雑誌』『建築世界』、1618 件の建築作品を収集したが、今年度は竣工年が明記されてある作品に限定し、とくに構造に関する情報を収集した。その結果、240 件の作品について情報を取得し、データベースを作成した。

この時代の構造形式については、今回の調査でも確認されたとおり多様な構造形式が共存する過渡期であった。しかしその中で、煉瓦・石造は減少し、鉄筋コンクリート造は増加していった。

建築様式に関する分析から、1910 年代にはまだルネサンス様式が優勢であったことがわかった。一般には、近代建築の登場に向かって、対称性や三層構成といった古典的構成は次第に減少すると認識されているが、実際にモールディングのない窓は漸減するものの、1910 年代後半、単純対称、複合三層構成は増加している。また、コラムあるいはピラスターをもつ建物はいずれも持たない建物よりもつねに多く見られた。ただし、ピラスターは 1910 年代後半のセセッションに採用されていた。

様式と構造の関係を見ると、新構造と見なされた鉄筋コンクリート造でもルネサンス様式が採用される場合が相当数あった。1910 年代後半に増加した単一对称立面の建物はともに鉄筋コンクリート造であった。また鉄筋コンクリート造にはコラムはめったに用いられず、またモールディング窓のないものも目立っている。

1910 年代には鉄骨造と鉄筋コンクリート造はすでに知られた構造形式となっており、多くの建築家たちが新しい構造による新様式の創造を提唱していた。そのなかで、『建築雑誌』1914 年 6、8、9 月号に連載された土居松市の「コンクリートの壁体に就て」と題する記事は、おそらく最初に鉄筋コンクリート造と建築様式の間を具体的に論じたものである。土居は鉄筋コンクリートによる構造の特徴を「張壁式構造法 (Curtain wall type of construction)」とし、新しい様式の創造を促した。しかし、今回の分析結果を見るかぎり、実際には張壁式骨組構造の鉄筋コンクリート造は従来のような装飾を施すことが困難であったことから、単一对称で三層構成をもつ簡略化したルネサンス式としてデザインされる傾向にあったことが明らかになった。